

今宵、彼は紳士の仮面を外す

### プロローグ

「お疲れ様でした、失礼します」  
週に一度のノー残業デーの水曜日、朝来陽菜は終業時間ぴったりに席を立ち、エレベーターホールに急ぐ。

到着したエレベーターにさっと乗り込み、ちらりと腕時計に視線を落とす。  
午後五時三分。

(これなら、間に合いそう)

毎週水曜日。それは陽菜にとって特別な日だ。  
バス通勤の彼女は、会社最寄りのバス停に立つと、やって来たバスに足取りも軽く乗った。

二月半ばの柔らかい夕暮れの中、一つ先のバス停にバスが停車する。すぐに陽菜と同じような仕事終わりの男女や学生たちが乗り込んできた。

毎日、変わらない光景。でも水曜日だけは、違う。

——あのんだ。

OLに次いでスーツ姿の若い男性が現れる。

その人を見つけた瞬間、バッグを握る陽菜の手にきゅつと力がこもった。

男性の年齢はおそらく二十代前半。新社会人ではなさそうだが、二十八歳の陽菜よりは年下だろう。柔らかな黒髪に茶色がかったアーモンド色の目。形の良い眉も、すつと通った鼻筋も、驚くほど整っている。その上、彼を取り巻く雰囲気は柔らかい。

優しそうな顔立ちだから、というのはきつとある。

でも陽菜は、名前も年齢も知らないその人が、見た目だけではなく中身もとても優しい人だということを知っていた。

彼は、入り口付近の空いていた席に座ると、バッグから取り出した文庫本を読み始める。

けれど、次のバス停に到着する少し前に本をしまう。そして扉が開く直前に立ち上がり、さりげなく席を空けるのだ。

空いたその席に座るのは、決まって大きくお腹の膨らんだ女性だった。

今日も彼女は、愛おしそうに両手をお腹に添えて、バスに揺られる。

そして先ほどまでその席に座っていた彼は、何事もなかったように立っていた。

——初めは、偶然だと思った。

しかし、二回、三回と同じことが続き、彼のその行動が意図的なものだと察する。

彼の親切をきつと女性は知らない。そんなさりげない気遣いが素敵だと陽菜は思っていた。

彼に会えるのは水曜日この時間のバスだけ……

だから、水曜日は陽菜にとって特別な日なのだ。

1

『あんたほど見た目と中身にギャップがある女は、いないわよね。ある意味詐欺よ、詐欺。男に訴えられないように気を付けなさい』

それは、陽菜の親友、佐倉胡桃の言である。

詐欺なんてとんでもないと思うものの、陽菜は何も言い返すことができなかった。

たしかに陽菜は、名前こそ可憐だけれど、お世辞にも可愛らしい外見はしていない。

中高とバレーボール部に所属していたせいも、身長は百七十センチと女性にしては随分と高めだ。ヒールを履けば男性を越してしまうこともしばしばある。週の半分はジムに通っているため、身体に女性的な柔らかさがほとんどない。

さらに目鼻立ちがはっきりしているほうなので、世間一般では美人の部類に入るとも言われるが、かなり「キツイ」見た目だ。

ならばせめて、雰囲気だけでも柔らかくできないだろうか、大学入学を機に初めてメイクを試し、「ゆるふわ系」を目指した。けれど、『あんたに可愛い系は似合わない』と胡桃に一刀両断されてしまったのだ。

代わりにと、ファッションセンスに優れた彼女は、陽菜に「綺麗系」メイクを教えてくれた。髪

は一度も染めたことがなく、肩のあたりで切りそろえている。

以来、陽菜の見た目が「可愛らしく」なったことは一度もない。

——そんな中、「女王様事件」が起こった。

大学一年生の時、陽菜は学園祭のミスコンにエントリーされてしまったのだ。

自分の知らないところで申し込まれたため一度は辞退したのだが、先輩たちの「どうしても！」というお願いコールに負けて参加した。

綺麗な人ばかりエントリーされているし、すぐに落ちるだろうと気楽に考えていた陽菜は順調に選考を通過してしまう。そして、決勝戦の審査項目に「コスプレ」があったのだ。

なんでも、候補者に一番似合うであろう衣装を事前投票で決定したという。

陽菜に用意されていた衣装は、真つ黒なボンデーコスチュームと鞭むち、そしてピンヒールだった。上半身は、体にぴったりとフィットするレザー素材のノースリーブ。下半身は、同じくレザー素材のホットパンツに網タイツ。

そう、俗にいう「女王様コスプレ」である。

(こんな……こんな衣装、着られるはずじゃない！)

しかしミスコン決勝戦をドタキャンする勇氣は陽菜にはなかった。

——その結果、まさかの優勝。

生来のキツめな顔と、このミスコンの相乗効果で、陽菜の大学でのあだ名は「女王様」に決まってしまったのだ。

以降、告白してくる男性は増えたが、彼らは陽菜に対して一様に同じ願望を抱いている。

『朝来さんはしっかりしているし、頼りになりそう』

『あなたについていきます！』

『自分を叱ってくださいませんか？』

草食系男子ならぬ、調教されたい系男子が殺到したのだ。

けれど、陽菜が派手なのは見た目だけ。当然、彼らの告白には応えられない。

しかしそれが一年以上続き、いい加減陽菜はあきらめた。

もしかしたら、実際の自分を知っても好きだと言ってくれる人もいるかもしれない。そう思った陽菜は、大学三年生の時に初めて告白を受け入れた。

そしてたったの三か月で『思っていたような人じゃなかった』という理由で、あっさり振られてしまったのだ。

それ以降も寄ってくる男性は皆いたり寄ったりだった。

就職をきっかけにイメーシ脱却を図るものの、失敗。陽菜は今なお「従属系男子告白数」を更新中なのだ。



「あ、朝来陽菜さん、僕と付き合っていただけませんか!？」

ある週の水曜日。いつもならバスに揺られているはずの陽菜は、突然の告白に固まった。ほんの三十分前、浮かれて帰ろうとしていたところを、取引先の人間に突然呼び出されたのだ。

「……田中さん、どうして私なのでしょうか？」

「朝来さんならきつと、僕のことを調教……じゃなくてええと、引つ張っていつてくれると思ったからです！」

調教。確かに今、そう聞こえた。しかしそれに触れるのはさすがに怖い。

「引つ張る……ですか？」

そう聞くと、取引先の営業である田中は「はい！」と意気揚々と返事をする。

「朝来さんはしつかりしているというか、遅しいというか、仕事をご一緒していて本当に頼りになる方なので……ああ、もちろん見た目が遅しいという意味じゃありませんよ！」

もじもじと照れながら俯く田中を前に、陽菜の笑顔は強張る。

（……また、これなのね）

ここは、田中に指定された会社近くのファミリーストランド。夕方なので店内は学校帰りの学生たちで賑わっている。スーツ姿のサラリーマンは数えるほどのそこで、田中は目立っていた。

陽菜は仕事の話だと思ったから呼び出しに応じたのに、突然の告白である。

「その、お互いにいい年齢ですし、可能であれば将来を見据えたお付き合いをしたいな、と……」

田中がやけに決意に満ちた瞳で見つめてくる。

百歩譲って「仕事の用事」と偽ったのはいいとしても、場所を考えてほしかった。

ひきつる頬をなんとか堪えて笑みを浮かべたまま、陽菜は毅然と言い放つ。

「ごめんなさい」

すると田中は見ているこちらが申し訳なくなるくらい、悲しそうに眉を下げた。

「えっと、それはダメ、ということでしょうか」

「……はい」

陽菜は深く頭を下げる。

「申し訳ありませんが、田中さんとお付き合いすることはできません」

「あは、あはは……そうですよ、僕なんかじゃ朝来さんに相応しくありませんよね」

「いえ、そんなことはっ！」

相応しいとか、相応しくないとか、そういう話ではないのだ。そう説明する前に、田中は自分で結論を出してしまう。

「いいんです。そもそも僕みたいな男があなたのような女性に告白すること自体、間違っていました」

「あのですね、田中さん、ですから——」

「僕なんか地味だし、これといった特技もないですから……。趣味と言ったら漫画を読むくらいです。朝来さんはプライベートで漫画なんて読まないでしょう？」

そんなことありません、という陽菜の言葉は、落ち込む田中には聞こえていないようだ。

会社の一部の人間からも「朝来さん、少女漫画とか全然興味なさそう」とか、「経済誌や新聞を読んでもイメージしかない」なんて言われることがあるけれど、とんでもない。

陽菜は漫画好きで、少女漫画雑誌を定期購読しているほどだ。

きつい見た目のせいか、男に興味がない、仕事一筋の女性と思われているらしいが、陽菜の中身はいたって平凡だった。

料理とお菓子作りが大好きだし、休日はゴロゴロして昼過ぎまで眠っていることもある。そして、本当は恋愛に対して人並み以上に興味があった。

なぜなら二十八年間の人生で恋人がいたのは大学時代に一人だけ。それもお付き合い期間はたったの三か月間だ。

それでも、陽菜の外見だけを気に入ってくれる男性とは付き合う気になれない。

「朝来さんなら、頼れると思ったんだけどなあ……」

なぜなら、彼らは超草食系男子、もとい陽菜に頼りたい「調教されたい系」男子だからだ。唯一、大学時代に付き合っていた彼は違ったが、なよなよした女は苦手だと公言する類の男性だった。

「あの、本当に田中さんがどうというお話ではないんです。漫画は私も好きですよ」

「それじゃあ、理由をお聞きしても……?」

田中と――否、彼のような男性となぜ付き合えないのか。それを正直に伝えることは、陽菜にはできなかった。

どうせ、素直な気持ちを告げたところで、信じてもらえないのだ。

陽菜は、何度使ったか分からない常套句を口にする。

「……今は仕事が楽しくて、誰かとお付き合いする気になれないんです」

(私には誰かを調教したり、女王様になるような趣味はないんです)

――なんて、馬鹿正直に言えるわけがない。

本音を言えば、男らしい人がタイプだ。

「だから、ごめんなさい」

陽菜は静かに頭を下げた。



田中を残してファミレスを出た後、陽菜は会社に戻った。

――株式会社花霞はながすみ。それが、陽菜の勤める会社だ。老舗ジュエリー販売会社である、その会社の商品企画部に陽菜は所属していた。

主な業務内容は、新たな商品の企画とその販売戦略を考えることだ。関係各所と連携して生産ラインを整えたり、広報の役割を果たしたりすることもある。華やかな印象とは裏腹に、山積する地味な事務作業をこなす部署だ。

特にここ一か月の忙しさは例年を超えていた。

花霞は来年の秋で創業五十周年を迎える。それを記念して、新ブランドの立ち上げが検討されており、社内での企画コンペが開催されることになっているのだ。

陽菜は現在、この企画に全力を注いでいた。とはいえ、今のところいくつもの案が浮かんで消

えている。どれも自分の中で「これ！」といった決定的な何か、言うなれば芯のようなものが足りない気がするのだ。

中々良い案が浮かばず、焦りを感じ始めているのに、今日、もう一つ、焦りを感じ始める事柄ができた。

(……私もそろそろ真剣に考えたほうがいいのかしら)

『将来を見据えたお付き合い』

田中は確かにそう言っていた。

気付けば陽菜も二十八歳。入社から早六年以上が経とうとしている。

同期や先輩が恋愛に励んでいたその時間を仕事に費やした陽菜は、今や主任となっていた。年齢からすると中々の出世らしい。

代わりに、「水曜日の彼」以外の楽しみといえば、ジムと帰宅後のビールだけだった。

自分なりに独身生活を謳歌しているつもりだったが、これではいけないのかもしれない。

現に、ここ一、二年は結婚式に呼ばれることがぐっと増えている。それに加えて、二十六歳を過ぎたあたりから告白の際に「将来を見据えて」の言葉を使われることが多くなった。

(あれ、もしかして私……のんびりしすぎ?)

ピタリとキーボードをタイピングする指が止まる。

そればかりが気になり陽菜は結局、その日の仕事はそこで終わりにして帰宅した。

翌日。

「ひーなさんっ!」

陽菜に声をかけてきたのは、四歳年の離れた後輩社員——小宮絵里だった。

「小宮さん、仕事中の名前呼びはダメよ。いつも言ってるでしょう?」

「残念でした。ちょうど今お昼休みになりましたよ。ランチ、行きましょ?」

苦笑交じりに小言を言うと、小宮はにっこり笑みを返す。

(まったく、ああ言えばこう言うんだから)

しかしそんなところも可愛いと思ってしまうのは、彼女が、陽菜が初めて正式に持った部下だからだ。ちなみに小宮は見た目も仕事も実に可愛らしい。緩く巻いた茶色の髪に流行りのメイク。百五十センチの小宮と百七十七センチの陽菜が並ぶとまるで子供と大人だ。

「ごめんね。まだやりたい仕事が残っているから、今日はデスクで簡単に済ませるわ」

いつもの陽菜なら小宮の誘いに乗るところだが、あいにく今日はそんな気分になれなかった。

昨日の田中の告白が尾をひいている。告白は振るほうだつて気力を消耗するのだ。

「ダメですよ、ちゃんと食べなきゃ。それに『休憩をしつかりとるのも仕事のうち』って教えてくれたのは陽菜さんですよ?」

確かにそう言った。間違いない。

陽菜が思わぬ切り返しに言葉を詰まらせていると、小宮は更に続ける。

「それに、聞きたいことがあるんです」

「聞きたいこと？」

「昨日、ファミレスで田中さんと一緒にいらっしやいまし——」

「わーっ！」

「ファミレス」と「田中」。その二つのキーワードに陽菜はすぐさま立ち上がり、大きな声で小宮を遮った。

「絵里ちゃん待って、ストップ！」

フロアに残っていた社員の視線が集まる。

陽菜は、こほん、とわざとらしく咳払いをした。名前呼びはダメと注意したばかりなのに、自分が呼んでしまった。

「絵里ちゃ——じゃなくて、小宮さん」

陽菜は頬を引きつらせたまま小宮と向き合った。

「やっぱりランチ、行きましようか」

後輩は可愛らしい笑顔で、「はい！」と元気よく返事したのだった。

二人は会社から歩いて数分の喫茶店に入った。陽菜がさあどうしたものかと考えていると、小宮にさっさと話を切り出される。

「それで陽菜さん、やっぱり田中さんを振っちゃったんですか？」

「……昨日、あのお店にいたなら聞こえていたんじゃないの？」

「はい。田中さんが陽菜さんに告白したところまでは聞いちゃいました。それ以上は失礼かと思つて、お化粧室に行つて戻ってきたら、もの凄く凹んだ顔をして帰る田中さんとすれ違つたんです。ああ、陽菜さんまた振つちやつたのかあ、と」

基本的にノリが軽くて陽菜に対しても気安い態度の小宮だが、彼女は業務とプライベートの切り替えが実に上手だ。そんな小宮が昨日のことを言いふらすとは微塵も思っていない。

それでも陽菜はどうごまかすかばかりを考えている。

「陽菜さん、やっぱり草食系男子が苦手なんですわね」

「そんなことないわよ？」

小宮は、「またまたあ」と可愛らしく肩をすくめる。

「じゃあどうして田中さんがダメなんですか？ 陽菜さん、今彼氏いませんよね？」

「……え、ええ」

今、どころか恋人なんてもう何年もいない。

更には言えば過去にもたった一人だけ。

——恋愛の話は、苦手だ。

小宮を始め女性社員は恋バナが大好きだが、陽菜はいつも聞き役に徹している。自分のことを聞かれた時は「忙しいから」「仕事が楽しいのよ」と笑顔でかわしていた。

入社以来、ずっとそれで乗り切ってきたのに。

「田中さん、確かにぼつと見は地味だけど優しそうだし、大手広告代理店勤務ですよ？ かなりの



好条件だと思えますけど……。草食系でもいいと思うのになあ」

珍しく小宮はくいさがる。

彼女の言いたいことはとてもよく分かった。陽菜だって彼が草食系だから断ったのではない。しかし彼は、ただの草食系ではなかったのだ。

——調教してほしいって言われたの……

(そんなこと、言えないわ)

いや、正しくは「調教」と言いかけただけではあるが。

個人的なお付き合いはお断りしたが、彼は大事な取引先の社員。今後、小宮と仕事をする可能性は大いにある。迂闊なことを言って変な印象を与えては田中にも失礼だ。

陽菜は昨日の田中同様、小宮に対しても使い慣れた言い訳をした。

「今はお仕事が楽しいから、恋人を作る気にはなれないの」

常套句じょうどうくにもかかわらず自分の中に違和感が残る。

本当は恋愛に興味があるし、恋人もほしい。

ところが悲しいことに、陽菜に興味を持ってくれる人は特殊すぎるのだ。

「陽菜さん、甘い！ そんなこと言ったら、あつという間におばあさんになっちゃいますよ！」

しかし、陽菜の気持ちに分かるはずもない小宮は、更に追い打ちをかけた。

「そんな、おおげさよ」

「そんなことないです。陽菜さんだって前に言ってたじゃないですか。働き始めると一年なんて

あつという間に過ぎちゃうって。私それ、最近最近凄く実感してるんです」

「あなたが実感するには早いんじゃない？ だってまだ二十四歳でしょう？」

「『まだ』だけど『もう』二十四歳です。本格的に婚活を始めようとしたら、私より若い人、たくさんいますもん」

「婚活って……絵里ちゃん、確か彼氏がいたわよね？」

「別れました」

「あら、でもこの間、二人で温泉旅行に行っただってお土産みやげくれなかった？」

「そんなこともありましたね。……他に好きな人ができたそうです。ちなみに二か月ほど、二股されていました。同じ温泉に、私より先にその子と行っていたみたいなんですよ。しかも浮気相手は私の親友。あ、違った。『元』親友です」

「——最低ね」

陽菜は基本的に人の恋愛に立ち入らない。何かを言えるほどの経験がないため、適切な言葉が浮かばないのだ。

それでもこれくらいは分かる。

親友と浮気なんて、彼女をバカにするにもほどがあった。

「別れて正解よ。……うん、婚活、いいじゃない。そういう場で探すのも悪くないと思うわよ」

「本当にそう思います？」

「もちろん」

大丈夫。絵里ちゃんなら、きつといい人が見つかるわ——そう陽菜が言いかけた時だった。  
「なら陽菜さん。コレ、行きませんか？」

小宮はスマホの画面をこちらへ向ける。その画面を見た陽菜は、目を見開いた。

「——これ、婚活パーティーの参加受付メールよね？」

「はい。私が申し込んだやつです。来週土曜日の午後六時から、ホテルのレストランを貸し切つてのビュッフェ形式だそうです。なんとレストランはイタリアンで、星付きですよ！」

男性の参加可能年収ラインや年齢など、小宮は流れるように説明する。

なんでも、普通に生活していたら中々知り合わないだろう男性たちが参加するらしい。それだけで小宮の本気度が伝わってくる。

『「行きませんか？」って、申し込んだのはあなたでしよう？」

「はい。でもその日、友達の結婚式が入っていたのを忘れてて」

「忘れてたって……あなたが？」

仕事でも滅多にミスをしていない小宮が、そんなうっかりをするなんて信じられない。

しかし話を聞くと、彼女は元カレと別れてすぐに勢いで申し込んでしまったのだという。

「あんな男よりいい人見つけてやる！　って頭に血が上<sup>のぼ</sup>っちゃったんです。キャンセルするのはもつたいないし……主催者に確認したら、代理参加も可能だって。——だから陽菜さん。私の代わりに行ってくれないませんか？」

そう言つて小宮は凄<sup>す</sup>みのある顔で笑つたのだった。



帰宅中のバスの中、片手にスマホを持った陽菜は、小宮から転送されたメールをじっと見つめた。時刻は午後八時を回つたばかり。水曜日以外は残業が当たり前なので、これでもいつもよりは早い時間帯だ。

この時間の車内は仕事終わりの会社員で混みあっている。当然空<sup>す</sup>いている席はなくて、陽菜は入り口の少し後方に立っていた。

本音を言えば座りたいけれど、すし詰め状態になる満員電車に比べればずっといい。

(婚活、かあ)

『「まだ」だけど」「もう」二十四歳です』

小宮の言葉を聞いた時、正直なところドキリとした。

そんなことを言ったら陽菜なんてアラサーだ。

三十代になるのが嫌なわけではない。職場には四十を過ぎても輝いている先輩がたくさんいる。

(でも、恋愛初心者のアラサーとは違うのよね)

——恋がしたい。

恋は、女性を美しくする。可愛らしい子はよりいっそう華やかになるし、あまり垢<sup>あか</sup>ぬけていなかった子もキラリと光り始めるのだ。そんな女性を見る度に陽菜は「いいなあ」と思う。

しかしいざ自分に置き換えると、「また見た目で判断されたら」と考え、きおく 気後れしてしまうのだ。社会人になって二、三年目くらいまでは誘われた合コンに顔を出すこともあったけれど、陽菜を「いい」と言ってくれるのは外見を気にいる人ばかり。

いつしか諦めの境地になっていた。陽菜はもう一度、メールに視線を落とす。突然のお誘いは保留にしてあるものの、もしかしたらこれがきっかけになるかもしれない。

男性はいずれも好条件な人たちだというが、陽菜は、恋人に必要以上のお金や学歴を求めていなかった。条件は、陽菜を見た目で「頼れる女王様キャラ」と判断しない人。

少し我儘わがままを言えば、男らしく自分を導いてくれる人がいい。

更に夢を見ていいのなら――

（――あの人が、恋人だったら）

そう、想像した時、バスが停車した。数人が降りると、一気に乗客が乗り込んでくる。

気になっているあの男性が乗ってくるバス停だ。乗客の中に彼がいればいいのにと思いつつ、水曜日のあの時間帯ではないので無理だろうと、陽菜は視線を再びスマホへ向けようとした。

その時、視界の端に一人の男性の影が映る。

「あ……！」

突然声を上げてしまい、乗客の数人が驚いたように陽菜を見た。しかし陽菜にそんなことを気にする余裕はなく、視線をただ一点に――あの男性へ向ける。

抜群に整った顔立ちの彼は、混みあう車内の流れにそって乗り込んできた。そしてなんと、固まる陽菜の隣に立ったのだ。会えるはずがないと思っていた人。今さつき「恋人だったら」と想像したばかりの人が、すぐ側そばにいる。

（嘘、でしょう……？）

その現実を受け止めた瞬間、陽菜の心臓は未だかつてないくらいに激しく高鳴った。鼓動が体の芯から響いている気がする。

（ど、どうしよう？）

陽菜の頭の中はそれでいっぱいだ。

ただ見ているだけで満足だった憧れの人が、肩が触れ合うほど近くにいます。見ているだけの時は数分間がとても短い気がしたのに、今はとても長く感じた。窓の外を通り過ぎる見慣れた景色も、車内の雑音も、全てが遠ざかり、切り離されたような感覚おぼえに陥る。

陽菜の全神経は、ほんの数センチ隣の彼へ注がれていた。けれど、顔は上げることができず、ずつと俯うつむいたままだ。

今時初恋を知ったばかりの小学生でも、こんな反応はしないだろう。

その時、不意に足元が揺れた。バスがカーブを曲がったのだ。

陽菜はバランスを崩した。ヒールが床を滑って、上半身が後ろに傾く。

「――っと」

その時、大きな手のひらがそつと、陽菜の腰を支えた。

「……大丈夫ですか？」

あの男性が助けてくれたのだ。

彼が触れていたのは、陽菜が体勢を整えるまでの間だけ。はつと隣を仰ぎ見る頃には、男性の手はつり革へ戻っていた。

ほんの一瞬の出来事。しかし確かに彼は、陽菜を支えてくれた。

「あ、ありがとうございます」

突然のことにぼかんとしながらも、陽菜はどうか礼を言う。

「どういたしまして」

男性は、柔らかく微笑んだ。

その破壊力たるや、凄まじい。

初めて間近に聞く声は、想像より少し低く掠れている。何より、やけに色っぽく陽菜の耳を直撃した。腰が砕けそう、とはこのことだ。

「もしかしてこれはチャンスなのは」と、陽菜は思った。

(話しかけても、変に思われないかしら)

——ありがとうございます。実は、何度かバスで一緒にいるんです。

いきなりそんなことを言ったら、妙な女だと思われないだろうか。

でも、こんなチャンスはこの先二度とないかもしれない。

陽菜は彼に声をかけようと視線を上げる。しかし、すぐに後悔した。

彼は、ある一点を見つめていたのだ。視線の先は、なんの変哲もない化粧品の中内広告。だが、その中で一つ目を引くものがある。

新作のルージュを手に微笑む女性——今十代の若者の間で絶大な人気を誇るモデルの美波だ。

ふわふわとなびく茶色の髪、柔らかな微笑みを湛える顔は、この世の「可愛い」の全てを体現している。

同性の陽菜でも守ってあげたいと思うほど庇護欲をそそる可憐な容姿。それは陽菜の外見の対極に位置するものだ。

美波を見つめる男性の視線はとても優しい。

その表情は今まで見てきたどんな彼よりも柔らかく見えた。

まるで恋人を見るようなその視線に、陽菜の中にもやもやが広がっていく。

(……ああいう女性が好きなのかしら)

高鳴っていた鼓動がすつと引いていった。

彼は悪いことなんて何もしていない。それなのに心が冷えてしまい、傷つけられた気持ちになる。

自分ひとりが浮かれていたことを陽菜は、途端に恥ずかしく思った。

自宅最寄りのバス停につくまでずつと隣を見られなくなる。

それから数日、陽菜の頭にはあのモデルの笑顔がちらついて離れなかった。

「あんた、ばか？」

その週の金曜日の夜。久しぶりに食事をしようとして待ち合わせた親友の佐倉胡桃は、一連の話を聞くなりそう言い切った。

『「何度か同じ時間のバスでお見かけしたことがあります」くらい、なんて言わないのよ。せっかくバス王子が隣に来たっていうのに！」

バス王子——あまりに安直な名前に陽菜は突っ込みたかったが、胡桃は止まらない。

「その時話しかけないで、いつ話しかけるの！ 見ているだけで満足って、小学生でももっと進んでるわよ」

「……あのね、胡桃。人には分かっているってできないことが……」

「そう言い続けて、もう二十八歳でしょうが」

胡桃の言葉は正論すぎて、陽菜はぐうの音も出ない。

「それに、芸能人と比べて凹へこんでどうするの。大体、美波と陽菜は全然タイプが違うじゃない。比べるだけ無駄。あんたの魅力は可愛らしさにはないでしょ。いい加減自覚しなさいよ」

テーブルに片ひじをついた胡桃は、左手でカクテルを揺らしながら「まったくもう」と呆れたようにため息をつく。

あまり行儀がいいとは言えないが、お酒で薄うすらと頬を染めた彼女は、陽菜でさえドキツとするほど色っぽい。

透けるように真っ白な肌に、ぱつちりと大きな目、ふわふわと緩ゆるく巻いた髪。胡桃もまた「可愛い」を体現する女性だ。

しかも実家は誰もが知っている製菓会社を経営している。

そんな超お嬢様である胡桃は、良くも悪くも裏表のない人間だ。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。異性の好みも同様で、彼女の恋人に対する第一条件は「顔」である。第二条件は「一般常識を持っている」ことだった。見た目も中身も、異性関係ですら彼女は陽菜と正反対のタイプだ。

だからだろうか、高校で知り合ってから、妙に馬が合った。

「胡桃ならそうするでしょうけど、会えるとは思っていなかったから驚いてそれどころじゃなかったの。仕方ないと思わない？」

「思わないわね。私なら気になった段階で話しかけているもの」

「私も話しかけようとしたわ。ただ……怖おそ気付いてしまって。熱心に見ていた相手は超人気モデル、こっちは恋愛初心者のアラサーよ？」

「そんなド派手な顔で恋愛には小心者、なんて意外よねー。陽菜、会社ではクールなバリキャリで通してるんでしょ？ ギャップ萌えでも狙ってるの？」

「……そんなの狙う余裕があれば、今頃恋人がいたでしょうね」

「確かに。自分のことよく分かっているじゃない。高校の時みたいに会社でも後輩の女の子に

きゃーきゃー言われてるんでしょ。どうせなら男の一人や二人、はべらせてみなさいよ」

「慕ってくれる子はいるけど、きゃーきゃーなんて言われてないわ。……なんだか胡桃、今日はずいぶんと毒舌ね」

「そう？ いつものことでしょ。大体ね、美波は確かに可愛いけど、大人の色気で勝負すればいいじゃない。まあ、いいわ。それより、後輩ちゃんに婚活パーティーに誘われたんだって？」

「そうなの。これ、胡桃の会社が主催しているものだって本当？」

胡桃は自ら会社を立ち上げ、婚活コンサルタントとして活躍しているのだ。

陽菜がスマホの画面を見せると、胡桃は「ああ」と目を瞬かせた。

「私の企画だわ。へえ、後輩ちゃんもいいところに目をつけるじゃない。今回の参加男性はかなりのレベルが高いわよ。個人的にもとってもおすすぬ。というか、私も陽菜を誘おうと思ってたの」「私を？」

「そう。この企画、どちらかと言えば婚活初心者向けに作ってるのよ。流れは一般的なもので、最初は全員と数分ずつ会話をし、次はフリータイム。最後にカップリングの発表。それだけだと何も面白くないから、料理と会場に力を入れたわ。カップルになれなくても舌を絶対に満たせるってわけ。もちろん気に入った人がいれば、ホテルに泊まるのもありよ」

「一夜限りの恋ってこと？」

「あら、『そんなの、はしたない！』とでも言うつもり？」

「そうは言わないけど、会ったその日に、なんて私にはハードルが高すぎるわ。それに、合コンッ

て苦手で……」

「じゃあ、あんた、ずっとそのままでもいいの？」

胡桃はすつと目を細める。

「気になる人がいても声をかけられない、そんな中途半端な状態で。確かに変態男しか寄ってこないのは同情するけど、仕方ないって諦めるのは怠惰よ。恋人が欲しいなら、自分から動かなきゃ」

その言葉は陽菜の心に突き刺さった。

中途半端。確かにそのとおりだ。仕事とちよつと特殊な人に好かれる性質を理由に、流されるように過ごして早六年。仕事は順調だけど、プライベートはずつと停滞したままで。

そう遠くない未来、後輩にどんどん先を越されるだろう。

気になった人の隣に立つだけでドキドキしてしまい何もできない、自分、

嫌だ、とすぐに思った。

「胡桃。私、行くわ」

小宮と胡桃、偶然にも二人から同じイベントに誘われた。これはきつと今動くべきだ、というお告げなのだ。

「洋服とメイク、もう一度教えてくれる？」

陽菜は胡桃に頼む。

「今日の飲み代で引き受けてあげる。楽しみにしてなさい、会場が一番の美女にしてみせるわ」

親友は、にっこりと笑ったのだった。



一週間後の土曜日。

婚活パーティー会場であるホテルに着いた陽菜は、イタリアンレストランがある二十二階へ向かった。エントランスホールを通り抜けエレベーターに乗り込んだ途端、どんだん心臓の鼓動が速くなっていく。

主催者の胡桃は先に会場入りしているため、陽菜は一人だ。一人で行動するのは、仕事ではもちろんプライベートでも慣れているのに、なんだか心もとない気がした。

その理由は多分、胡桃がいないからだけではない。

(この格好で大丈夫……よね?)

陽菜は、今、胡桃の選んだ勝負服を着ている。

センスのいい彼女が似合うと言ったものはきつと、陽菜に合っているはずだ。

ベージュのロングコートの首筋と袖口には、柔らかなファーが愛らしくついている。

そして肝心のコートの下は――

陽菜がコートの裾をきゅつと握ったその時、エレベーターが二十二階に到着した。

雑誌にもしばしば登場する有名シェフが料理長を務めるレストラン。そこを貸し切りとは、胡桃の力の入れようがうかがえる。

ドキドキしながらレストランに入り受付を済ませると、スタッフが簡単に今日の流れを説明してくれた。

大体は、事前に胡桃から聞いていたとおりで、受付を済ませた後は、開始時刻までプロフィールカードを書いて待つ。カードには氏名と職業、趣味を書く欄があるものの、名前は仮名でもいいと言われた。ナンバードプレートが配られ、その番号に基づいたテーブルに向かえばいいらしい。

パーティーがスタートすると、各テーブルを男性側が動き、女性参加者と数分間会話をするのだ。そしてその後はフリータイム。最後は気になった異性を三人番号で指名し、カップリング発表タイムとなる。

(確かにこれなら、初心者の中でも参加しやすいわね)

プロフィールカードに視線を落していると、「朝来様」と呼ばれた。

「コートをお預かりいたします」

受付の男性スタッフがにこやかに手を差し出している。

「脱がなきゃ、ダメですよね？」

自分の格好を思い返した陽菜は咄嗟とつさにそう言ってしまった。けれどすぐに「なんでもありません！」とごまかす。スタッフは、陽菜の言葉に少し驚いたようだが、何事もなかったみたいに微笑んだ。

「会場は空調も効いていますし、寒いということはないかと存じます。万が一、気になるようでしたら遠慮なくおっしゃって下さい」

「……はい、ありがとうございます」

その完璧な応対に観念して、陽菜はコートをスタッフへ預けた。

途端に、暖かな空気が素肌をさらりと撫ぜる。

今、陽菜は胡桃の全面プロデュースによる衣装を身につけていた。

親友が選んだのは、普段の陽菜なら絶対に手にしない、胸元がざっくりV字型に開いた黒のニットワンピースだ。膝下丈のそれは体のラインにフィットし、陽菜の肉体を際立たせる。背中部分は編み込みになっていて、歩く度に紐の先端がふわりと揺れた。胸元には自社製品である一粒ダイヤのネックレスが輝いている。

陽菜の仕上がりを見た親友が満足そうに微笑んだので、普段はしない格好に戸惑っていた陽菜も中々いいのではないか、なんて思ったりした。しかしいざ会場に来てみると、すーすーした感覚が落ち着かない。もしかして自分だけ気合を入れすぎてしまったのでは、なんて考えてしまう。

その証拠に、受付を終えて指定されたテーブルに向かう僅かな間にも、陽菜は、会場にいた他の参加者の視線を感じた。意識すると更に落ち着かなくなりそう、陽菜はあえて全てを無視し、前を見る。その間も心臓はドクドクと早鐘を打っていた。

(目立つてる……?)

その時、ポン、と後ろから肩を叩かれた。

「ひゃっ！」

素肌に触れた手に、弾かれたように振り返ると、胡桃が笑っている。

「やっと来た。中々姿が見えないから、怖気付いたのかと思ったわ」

「胡桃！」

見慣れた姿に陽菜は一気に安堵した。

胡桃は、普段の華やかな私服とは打って変わってシンプルなダークスーツを着ている。主催者なので気を遣っているのだろう。

「陽菜、挙動不審になってるわよ。目立つから少し落ち着きなさい。それに顔が引きつってる、緊張しすぎね」

「緊張するわ。こういうのは久しぶりなんだから」

「大丈夫よ。会話に詰まったら、仕事相手だと思えばいいわ。全く興味がない相手なら大根と同じでしょ」

「大根って……でも、確かにそれなら大丈夫かも」

そう答える陽菜の全身を眺め、胡桃は改めて満足そうに頷いた。

「いいじゃない。その服やっぱり似合ってる。——って何よ、その顔。私のセンスに文句でもあるの？」

「違うわ。ただ、視線を感じるの。露出度が高すぎじゃないかしら」

「それは……まあいいわ、今は自覚しなくても」

「胡桃？」

「他の参加者を見てみなさい、陽菜より肌を出している女性はいっぱいいるわ」



陽菜はさつと会場内を見回す。なるほど、先ほどまでは緊張で見えていなかったけれど、確かに陽菜以上にセクシーな格好の女性がちらほらいた。

ほつとすると同時に、自意識過剰だったかも、と恥ずかしくなる。

「――ほら、そろそろ始まるから行きなさい。楽しんでね」

胡桃にぼんと背中を押され、陽菜は指定されたテーブルに向かった。

会話に困ったら仕事相手だと思えばいいとは、確かにベストなアドバイスだ。

自己紹介タイムを終えた陽菜はそう実感していた。

ジュエリー販売会社の商品企画部に所属する陽菜は、普通の会社員では出会えないタイプの様な異性と接する機会がある。それこそ目の覚めるような美形芸能人から、職人まで。

そのせいか陽菜はあまり緊張せずに対応することができた。

今回の参加者は、男女それぞれ二十名ずつの計四十人。

男性側は欠席か遅刻かは分からないが、予定より一人少ないものの、胡桃が太鼓判を押すだけあって、会社経営者、医師、弁護士……と俗にいう超高学歴な面々が集まっている。

仕事の時ほどバラエティに富んではないものの、全員スマートな態度で、会話中も手に持ったグラスが空になると、好みを聞いてすぐに新しい飲みものを持ってきてくれた。

会場内をゆつたりと流れるジャズも、参加者の華やかな装いも、全てが大人な雰囲気だ。

陽菜の知っている合コンでは、やけに男性がガツガツしているものだったから、この雰囲気は意

外だった。

中には何人かいいな、と思える男性もいる。だから、陽菜は油断してしまった。

パーティー開始から約一時間、フリータイムが始まってすぐ、陽菜は困惑していた。

「――へえ、企画の仕事をしてるんだ。確かに、凄く仕事できそうだね。自立した女って感じで」

「……ありがとうございます」

開業医をしているという男性が、フリータイム早々陽菜のもとにやって来た。誰かと話すきつかけをくれたことに初めこそ感謝したが、以降も彼はずっとこの調子で陽菜にまわりついている。

「この仕事をしていると色々な女性が擦り寄ってくるけど、やっぱり初めから金目当ての女が多いんだよね。初対面で年収を聞いてきたり、やたらベタベタ触ってきたり。それって俺の職業に群がっているだけで、俺自身を見てないじゃない？ そういうの、いい加減うんざりだよ」

彼はベラベラと自分のことだけを話す。

「その点、君みたいに自立した人はいいいよね。下手な男なんかよりよっぽど稼いでそうだ」

まあ、流石に俺には及ばないだろうけれど、と言葉の最後に自分を上げることを忘れない。

(……この人、苦手だわ)

陽菜は顔に愛想笑いを貼り付けた。

悪い人ではないのだと思う。しかし少々、自分のことが大好きすぎるように感じるのだ。

一通り自分のことを話し終えた男性は、「それで」と初めて陽菜に質問してくる。

「朝来さんはどうしてこのイベントに参加したの？ あなたほど綺麗なら、男なんてよりどりみど

りでしょうに」

「そんなことありませんよ。私が仕事ばかりで寂しい生活をしているのを見かねて、友人が誘ってくれたんです」

「またまた、そんな謙遜はいらさないよ。きつと男に対する理想が高いんでしょ？」  
理想——は、陽菜を外見だけで判断しない人。

それを理想が高いと言われてしまうのなら、陽菜はきつとこの先もずっと独身だ。

そんな未来が嫌で恋愛を楽しもうと思ったからこそ、このイベントに参加したのに。

「でもあなたはそれでいいと思うよ。変に媚びる女よりもよっぽどいい。それに、そこの男よりもよほど強そうだ」

強そう。その言葉も何度も言われた。

(あなたが私の何を知っているの?)

今や陽菜は疲れを感じていた。これが仕事なら我慢できる。しかしそうではない以上、この人と会話を続けようとは思えなかった。

だが、男性は止まらない。

「俺はそういう女性がいいな。どう、連絡先を交換しない?」

これは、明らかなルール違反だ。お互いの連絡先は、カップリングが成立して初めて交換することになっている。

だから陽菜は失礼がないよう、やんわりとその申し出を断った。

すると男性は笑顔を一変させ、不機嫌そうに顔をしかめつつも言い募る。

「これくらい、主催者も黙認するはずだよ」

この人と連絡先を交換したいとは、陽菜にはとても思えない。

ちらりと会場の隅にいる胡桃を見た。けれど彼女は忙しそうに他のスタッフとやりとりをしている。親友の企画を台無しにするような真似はしたくなかったので、陽菜は改めてやんわりと断った。

「……申し訳ないのですが、今は——」

「ちつ、そういうところが良くないんじゃないの?」

男性は不機嫌な様子を隠そうともせず舌打ちをすると、一步、陽菜へ詰め寄った。

「どんな男を探しているのか知らないけど、そんなにお高くとまってるからモテないんだよ。おかしいと思ったんだ。君みたいな女が婚活パーティーなんて。サクラかとも考えたけど、その性格じゃ恋人がいらないのも頷けるね」

陽菜は咄嗟に言葉を返せなかった。

連絡先を教えなかっただけで、ここまで言われるなんて。

そんな陽菜の様子に多少溜飲が下がったのか、男性はシャンパングラスを片手ににんまりと笑う。

「どう? 教える気になった?」

(そんなこと言う人に、教えるわけじゃない!)

いくら恋愛下手だって、こんな男はまっぴらごめんだ。呆れた陽菜はその場を離れようとする。

しかしあるうことか、男性は陽菜の手を握って引き止めた。

「なっ……!？」

「返事、聞いてないよ？」

ぞくり、と陽菜の背筋に悪寒が走る。さすがにこれは、ない。

陽菜はそれまで浮かべていた笑みを消して、手を振り払おうとする。そこに、さっと一人の男性が割り込んできた。

「——失礼」

凜とした声が陽菜の耳に飛び込む。

「先ほど、こちらを落としませんでしたか？」

彼はハンカチを差し出し、そう陽菜に問いかけた。

陽菜は何も言えなかった。彼の背後で医者だというあの男性が不快そうに抗議しているけれど、その声はやけに遠い。

(嘘、でしょう……?)

声をかけてきた男性が白いハンカチを陽菜に手渡そうとする。

「なんだ、君は!？」

不意に医師の男性がくいつとその人の肩を引いた。すると彼は「おっと」とやけに大げさに体を傾ける。その拍子にグラスの中身が少しだけハンカチにかかった。

それは、どこから見ても陽菜の持ち物ではない。それなのに彼は陽菜の肩をたたたく。

「大変だ、すぐに汚れを落とさないと。申し訳ありませんが、一緒に来ていただけますか？」

彼は陽菜だけに見えるようにウインクをした。

——話を合わせて。

そう、言っている気がする。

「はい！」

陽菜の返事にその人は満足そうに小さく頷き、腰にそっと手を添えてくる。そのまま陽菜を伴って歩き始めた。けれど、医師の彼が「おい！」と二人を止める。

「あなたは振り返らないでいい、俺に任せて」

そう、彼は陽菜の耳元で囁き、振り返った。

「何か？」

その時、彼がどんな表情をしていたか、陽菜には分からない。しかし医師は「ひっ」と引きつった声を出した。

「お話がないなら、失礼してもよろしいですか？」

彼の言葉に、それまでの勢いが嘘だったかのように医師が身を引く。

「行きましょう」

彼に連れられた陽菜はレストランを出る。そして店から出た直後、腰に添えられていた手は離れた。まるで、あの日のバスと同じ……

陽菜を助けてくれた男性は、あのバスの彼だったのだ。

(本当に……?)

嘘、どうして、信じられない。そんな心の声が陽菜の頭を一心にかけめぐる。  
「大丈夫？」

陽菜はろくに返事もできず、ただ、彼に視線を奪われていた。  
触れられていた腰がまだ熱を持っている気がする。

バスの車内で横に並ぶのではない。正面の、すぐ目の前にあの人の顔がある。

それはまるで白昼夢はくちゅうむのようで、陽菜はひたすら惚ぼろけてしまった。彼はその様子を違う意味とちに捉えたらしい。

「あまり酔っているふうには見えなかったけど、本当は気持ち悪い？」

「え……？」

「それとも連れ出されて嫌だった……とか？」

彼は少しだけ悲しそうに眉を下げる。

——可愛い。

瞬間的にそう思った。

彼はもともと優しい顔立ちをしているが、その表情に、陽菜自身も意識したことのない母性が大いに擦すられる。

「あなたが困っているように感じたから、つい。……迷惑でしたら謝ります」

「そんなことはありません！」

思わず大きな声を出してしまい、慌てて口をつぐむ。迷惑だなんて、そんなふうには誤解されるの

は嫌だ。

片手をそっと胸にあてて深呼吸をすると、改めて彼と向かい合う。

「……そんなこと、ありません。あなたがおっしゃったとおり少し困っていたので、その……とても助かりました」

陽菜は感謝の気持ちを込めて深く頭を下げる。

今、自分はどんな顔をしているだろう。真っ赤になっていないだろうか、髪は乱れていないだろうか。そんなことばかり気になってしまふ。

少しでも想いを伝えたくて、陽菜は顔を上げ、できる限りの笑みを浮かべる。

すると彼は一瞬目を見張った後、穏やかに、「なら良かった」と微笑んだのだった。

それはあの日——バスで『どういたしまして』と言った時と同じくらいの破壊力だ。

(やっばり、若いからかしら)

年下特有の無邪気さ——可愛らしさに加えて、そこはかたなく漂ただよう色気に頭の奥がくらくらする。

「顔、赤いですね。やっばり酔ってる？」

お願いだから、そんなに優しい笑顔を向けるのはやめてほしい。

あなたに会えて嬉みしくて見惚とれていました、とは言えず、お酒をほとんど口にしていないのに陽菜は「はい」と頷く。

「……つと、名前も名乗ってなかったですね」

彼は改めて陽菜と向かい合うと、にっこり笑った。

「本郷ほんごうといます」

「本郷、さん……？」

はい、と頷く姿は、やはりどことなく可愛らしい。

ずっと気になっていた男性の名前を知ることができて心踊らせていた陽菜は、「良かったら、あなたのお名前をお聞きしても？」と言われてはっとした。

「あっ——」

『あ？』

慌てて答えようとするものの、舌を嚙んでしまう。

(ああもう、最悪だわ)

こんな姿、会社の人が見たら驚くに違いない。しかし今の陽菜はキャリアウーマンでも、女王様でもなかった。憧れの人を前にして慌てる、恋愛初心者だ。

「……朝来陽菜です」

恥ずかしさを覚えながら名乗ると、本郷はぼちぼちと目を瞬またたかせた。

「陽菜さん。素敵な名前ですね」

そう、とろけるように微笑む。

「良かったら、抜け出ませんか？」

「え……？」

「スタッフには俺から話してきます。……実は無理に誘われて参加したんですが、乗り気じゃな

かった上に遅刻してしまって、今更入りづらいです。それに、勘違いなら申し訳ありませんが、あなたもあまり楽しそうに見えなかったから」

これは、夢だろうか。

「このホテルの上にバーがあるんです。そこで飲みなおしませんか」

それならどうか、覚めないでほしい。

「——俺とあなたの、二人で」

陽菜は夢見心地のまま、その誘いに乗った。



国内の外資系ホテルの中でも最高級ランクに位置するホテルの三十五階。このフロアは、政財界や芸能界といった各界のセレブ御用達だと聞いたことがあった。

一介のOLである陽菜がこのバーに来るのはこれが初めてだ。

「ここです。この店の酒はどれも美味おいしくておすすめなんです。気に入ってくれたら嬉しいな」

本郷が案内したそこは、おしゃれなバーラウンジだった。

エレベーターを降りた瞬間から、陽菜は目の前の光景に圧倒されている。

視界一面が夜景の海だ。

さすがは世界的に展開している超高級ホテルのバー、照明やBGMに至るまでも洗練され

ている。中央にはグラランドピアノが置かれ、シャンパンゴールドのドレスを纏った女性が軽やかなタッチでジャズを奏でていた。

本郷はさつとカウンター席に向かう。

「さあ、どうぞ」

顔見知りらしいバーテンダーと軽く挨拶を交わし、さりげなく陽菜に椅子を引いた。

陽菜がとまどっている、彼は二、三度目を瞬かせ、「ソファ席のほうが良かった？」と小首を傾げる。

「いえ、ありがとうございます」

陽菜はどきどきしながら、腰を下ろした。

「どういたしまして」

陽菜が続いて隣に座ると、本郷は「良かった」と小さく言う。

「ソファ席もいいけど、ここのほうがあなたとゆっくり話せると思うんだ」

さり気ない気遣いに加えてこのセリフ、陽菜は本気で眩暈がしそうになる。

「……私も、あなたとゆっくりお話ししたいです」

バスで見かけた時は、気配りができる柔らかい雰囲気の人だと思っていたが、今の彼はどんな異性よりも「男」を感じさせた。

「陽菜さんみたいな素敵な女性にそう言ってもらえると、俺も嬉しい」

ずっと憧れていた彼が自分の名前を呼んで、褒めてくれている。夢みたいな現実を、陽菜は嘖み

しめた。

「お上手ですね」

上ずらないように声を抑え陽菜が言うと、本郷は「本心ですよ」とさらりと返す。

彼とこんなふうに並んで、軽口を叩き合うなんて、胡桃や小宮にはつばをかけられていたことを思うと、驚くほどの飛躍ぶりだ。

「お酒は好きですか？」

「はい。こんなお酒落なバーに来ることはないの、詳しくはありませんが……」

「大丈夫。このマスターが出すお酒はどれも美味しいから」

「お任せしても？」

「喜んで」

本郷が注文したのは、陽菜が初めて耳にするカクテルだった。

カウンター越しにマスターがシェイカーを振る様子を、陽菜はそつと眺める。少しの沈黙。その時間が不思議と心地良い。

BGMは気付けばクラシックへ変わっていた。とても綺麗な音色だ。

ふと、視線を感じて隣を向くと、じつと陽菜を見つめる本郷と目が合う。

「私の顔に何かついていませんか？」

「いいえ？ ただ見惚れていただけです」

「みとつ……！」

言葉を失う陽菜を本郷が柔らかな眼差しで見つめる。

もしもこれが彼でなければ、陽菜は「ありがとう」とにこりと微笑み、スマートフォンに返すことができたろう。でも本郷の前ではどんな態度を取ればいいのか、分からない。

「……そんなに褒めても、何も出ませんよ？」  
驚きと、照れ。

陽菜は一瞬固まったものの、どうにか微笑み返す。すると本郷は「お気になさらず」と悪戯っぽく頬を緩めた。

出されたカクテルのおかげか、陽菜の肩から少し力が抜ける。もつとも、肩が触れ合うほどの距離に本郷がいるせいでやはりドキドキするし、お酒を口に行っているにもかかわらず喉の奥は緊張で渴いている。

このまま彼に会えた喜びに浸りたいものの、それだけではろくに話せずに終わってしまう。

(そんなの、もつたいたいわ)

せつかくの機会を無駄にたくない。

陽菜は、すうつと深呼吸をする。背筋を伸ばし、落ち着くのよ、と自分に言い聞かせた。

「――陽菜さんは、どんな仕事を？」

不意に本郷に話しかけられる。

「ジュエリーの販売会社でアクセサリーの企画と販売データの収集をしています」

そう答えると、素敵ですね、と彼が微笑む。

「でも、指輪をしていないんですね。アクセサリーを扱うお仕事の方は、皆さんつけているイメージがあったのですが。今は恋人の有無にかかわらず、左手の薬指に指輪をする女性がいるって聞いたこともありますし」

「それは、その……ピンキーリングなら、時々します。でも、初めて薬指につける指輪は、恋人からのプレゼントと決めているんです」

消え入りそうな声で陽菜は告げた。

「……いい年をして、恥ずかしいことを言っていると思われるかもしれませんが」

「そんなことない。素敵だと思いますよ」

本郷は柔らかな眼差しで陽菜を見つめている。

「……本郷さんはどんなお仕事を？」

ごまかすような陽菜の問いに、本郷は「しがないサラリーマンです」と悪戯っぽく微笑んだ。その後二杯目のカクテルを飲み終えた陽菜は、やっと気になっていたことを口にする。

「さつき、どうして私を誘ってくれたんですか？」

もしかして陽菜が本郷を知っていたのと同様、彼もまた陽菜に見覚えがあるから誘ってくれたのではないか――そんな淡い期待があったのだ。

「困っている女性を助けたら、その人がとても綺麗だった。今を逃したら駄目だと直感的に思ったから。……こんな軽い理由だと、引きますか？」

残念ながら本郷は、陽菜とバスが一緒であることに気付いてないようだ。それを少し切なく感

じながらも、陽菜は表情に出ないよう抑える。代わりに「ちよつとだけ」とわざとらしく答えてみせた。

「困ったな、嫌いになりました？」

本郷が眉を下げる。

嫌いになつてなるわけない。本音はむしろ、正反対だ。

陽菜は、ただの「憧れの人」としてだけではなく、「本郷」という一人の男性にどんどん惹かれていく自分に気付いていた。

彼はグラスが空になるより少し前に、さり気なく陽菜のお酒の好みを聞いてくれる。肌寒さを感じていると、椅子にかけていたショールをそつと肩にかけてくれる。何気ない会話の中で時折見せる、はにかんだ笑顔。グラスに触れる長い指先。

その一つ一つから目が離せない。

それに本郷は陽菜をしきりに「綺麗だ」と褒めてくれる。

憧れの人から発せられた言葉は、陽菜にとつてこの上ない賛辞に思えた。

(もしも、この人と恋愛できたら)

そんな期待を、してしまう。

「それにしても、陽菜さんはどうしてあのパーティーに参加していたんですか？ わざわざ婚活なんてしなくても、あなたには男のほうから寄つてくると思うけど」

俺みたいに、と本郷は肩をすくめる。

「そう言っていただけるのは嬉しいけれど、私はそんなにモテません。……モテるのはせいぜい、个性的な人たちにばかりだよ」

「个性的って？」

言った直後に後悔した。気付かないうちに酔いが回っているのだろうか。

前半はともかく後半は、あえて口にしなくてもいいことなのに。

案の定、本郷に突っ込まれる。

「それは、その……」

「その？」

どうやら答えない、という選択肢はないらしい。

陽菜はお酒を一口含んだ後、明後日の方向を向いて小さく答えた。

「調教されたい系男子、とか……？」

調教されたい系男子——改めて口にする、と、中々、強烈な言葉だ。

一瞬、二人の間に奇妙な沈黙が落ちる。

どんな反応が返ってくるのか気になった陽菜は、ちらりと本郷へ視線を戻した。すると本郷は、じいつと陽菜を見つめた後、ぶはつと噴き出す。

「な、何、それ？ ……初めて聞いた、そんなの」

本郷は片手で腹を押さえて笑っている。声こそ大きくはないものの、敬語が崩れているのに気付かないほど、ツボに入つたらしい。



「草食系とか肉食系とかは聞いたことがあるけど、ちょ、調教されたい系って……どんな男だよ。……もしかして陽菜さん、女王様になる趣味とかあつたりする？」

「なっ！」

女王様。それは陽菜にとって、禁句である。

「私は至ってノーマルです。SMの趣味なんてありません！」

叫んだ直後に、はっとした。

(私、なんて……!?)

超高級ホテルの、雰囲気の良いバー。BGMはグランドピアノが奏でるクラシック、それを彩る眩いばかりの夜景。そんなところで、大声でSMとは――

さっと視線を周囲に向けると案の定、いくつもの視線と目が合う。

「もう、やだ……」

恥ずかしい。穴があつたら今すぐ入りたいくらいだ。

陽菜はとでもではないが本郷の顔を見ることができなかった。そんな陽菜の肩にそっと彼の手のひらが触れる。

「ごめん、陽菜さん。からかいすぎました」

謝りながらも、彼の声は微かに震えていた。

「……知りません、もう」

「もう言わないから、顔を見せて？」

陽菜さん、と名前を呼ぶ声はとても優しい。いつそう、陽菜は彼を見られなくなる。

すると本郷が焦れたような声を出した。

「――見せてくれないと、キスするけど」

「なっ……!？」

さすがに陽菜は顔を上げる。すると本郷は、「やっと顔を見せてくれた」と優しく微笑んだ。

(ずるいわ)

そんな顔をされたら、何も言えなくなってしまう。

「……あまり、年上をからかわないで下さい」

せめてもと一言を返すと、本郷は笑いを噛み殺しながら「すみません」と謝ってくる。

その反応を見るに、やはり彼は年下のようなようだ。それなのにこんなふうにからかわれるなんて、これではどちらが年長者か分からない。

「――どんな男なら、あなたの恋人になれるのかな」

不意に本郷が囁いた。

「陽菜さんの好きなタイプを教えてくださいませんか？ 調教されたい系男子が好みじゃないなら、どんな男が好き？」

今、目の前にいるあなたがタイプです、とは言えなかった。「自分を女王様扱いしない人」とも。

陽菜は代わりの言葉を口に出す。

「……しいて言うなら、『優しい人』かしら」

——あなたみたいに。

最後の部分は心の中だけにしよう。

いつもなら、この手の質問に対する陽菜の答えは「男らしい人」と決まっていた。それだけを切り取れば、本郷は陽菜のタイプと真逆と言っている。

端正な容貌は世間一般の「男らしい」イメージではなく、綺麗と言ったほうがしっくりくる。

しかし、本郷からは不思議と男を感じた。「陽菜に叱ってほしい」なんて願望は微塵みじんも感じない。

(不思議な人)

こうして一緒に時間を過ごしたことで、彼の一面が見えてきたような気がする。

初めは見た目に惹かれ、さりげない優しさが素敵だと思っただけだった。けれど、このパーティーで会い、何気ない会話を重ねた今は、更に好きになっている。

本郷の醸かまし出す穏やかな雰囲気はとても居心地が良く、まるで真綿にふわふわと包まれている気持だ。

(……酔っちゃったのかしら)

今日、陽菜が飲んだのはカクテルを三杯。どれもとても美味おいしくて綺麗だったけれど、酔うほどではないはずだ。それなのに、体が火照ほてっている。

「顔、赤いですね」

「ごめんなさい。……酔ってしまったのかも」

この空気と雰囲気——本郷という男性に、酔ってしまったのだ。

陽菜は、じっと本郷を見つめた。

彼の大きなアーモンド色の目は澄んでいて、近くで見ると吸い込まれそうになる。

鼻筋はすっと通り、薄い唇も形が良い。

(本当に、綺麗な顔)

顔だけではない。その唇から発せられる声が低くて心地いいことを、陽菜は知った。

手のひらは思っていたよりも大きくて、スーツに隠れている体はほどよく引き締まっている。高めのヒールを履はいている陽菜より視線が高かったところを見ると、身長は百八センチ以上あるのだろう。

もしも、この胸に抱きしめられたら、一体、どんな気持ちになるのか。

「……陽菜さん？」

不意の呼びかけに陽菜ははっとする。同時にカラン、とグラスの氷が溶ける音がして我に返った。ずっと本郷の唇と胸元を見ていた。

これでは欲求不満なようではないか。物欲しげな顔をしていたらどうしよう、と陽菜は慌わてた。

(……はしたない)

「ごめんなさい、少し化粧室へ……」

そう言っただけで陽菜が立ち上がった時だった。

「あっ……」

急に動いた反動で一瞬、視界がゆがみ、ぐらりと足から力が抜けた。

「……っと」

それを遅<sup>たくま</sup>しい胸板が抱きとめる。

「大丈夫ですか？」

本郷が陽菜の顔を覗き込んでくる。

年下だろうにこうして触れると、本郷が大人の男なのだと分かった。

「は、はい」

陽菜は急いで体を起こす。しかし今度は、陽菜の腰に添えられた本郷の手が離れることはなかった。

「見た目と違って、そそっかしいところがあるんですね」

意外だな、と耳元で囁<sup>ささ</sup>かれて、陽菜の背筋がぞくりと震える。

「……ごめんなさい」

よりいっそうの羞恥<sup>しゆうぢ</sup>で、顔が上げられない。それなのに離してほしくない、このまま抱きしめてほしいと思っている自分がある。

「——陽菜さん」

陽菜の気持ちを讀んだかのような低くて心地よい声が、耳<sup>じ</sup>朶<sup>だ</sup>を震わせた。

「俺今日、ここに泊まっているんです。部屋に行きませんか」

ああ。私、この人が好きだわ。

自然とそう感じる。

「……あなたのことを、もっと知りたい」

その熱のこもった声に、陽菜は静かに頷いた。



『会ったその日に、なんて私にはハードルが高すぎる』

そんなふうに胡桃に言い返したのは、つい先日だ。

けれど陽菜は今、本郷の部屋に向かっていた。

ただけでいい。一夜限りでいいから、触れあいたい。

そんな、理性をかなぐり捨てても一緒にいたい人が、確かに存在したのだ。

——恋に落ちる。

酔いの回る頭に、陽菜はその言葉は何度も思い浮かべる。

陽菜はまさに転がり落ちるように本郷に惹<sup>ひ</sup>かれていった。

本郷が取っているという部屋に行くまでの間、二人は終始無言なもの、手のひらをしっかりと重ねたままている。

(胸が痛い)

陽菜は心臓が飛び出しそうなほど緊張していた。